

ど、取締りは嚴重にしなければならぬ。労働者は、かような政治的反動を、暴風雨の警報として受取つた。そして全世界の労働者は、足踏の労働者を激勵してその歩みを早め、一刻も早く人類を理想の境地に導くものは空想でなく、却て労働者の歩みを妨げ、彼等を長く牛馬としておかうとするこの空想であること、即ち革命的共産主義より

も、所謂「實際的」な改良主義こそ、空想の誇りを受けねばならぬことを悟つたのである。ルール地方の大罷業、伯林の電車労働者の大争議及び佛國労働者の八時間運動以來、社会主義への平和的進化に對する労働者の信念は消滅した。資本制度の諸勢力が、政治界に於ても經濟界に於ても、無産階級に對抗しては一致結合して居るこゝ、ブルジョア社会全體が、恐ろしい戦争の深淵に向つて刻々進んで行つて居ること、議會が社会の進歩に益々取殘されて行くこと、そしてそれは、何處の國でも、官僚と財閥の頭目とが密合して居る秘密な内閣政治のために、議會の權力が奪はれる結果であることが、労働者にはつきり分るようになった。

一九〇五年の露國革命は、労働者が一度び躍起すれば、そして主義のために身命を擲つ氣にさへなれば、どれほど偉大な勢力となり得るか、全歐の民衆に示したものである。そこで一九〇五年以來、労働階級の權力掌握の問題、即ち社会主義革命の實際問題が大に論ぜられるようになったのである。

『四』 權力掌握の道

民衆は、資本主義的進化が迷ひ込んだ袋小路から、どうして逃れ出ようといふ問題に熱中し始めた。労働者が起した第一の問題は「一體吾々は何處へ向つて進んでゐるのだ」といふことであつたが、是に對しては社会の發達が、最も明白に、的確に答へてつた。佛國に於ては、ブルジョア階級と提携して労働者の境遇を改善するといふ企ては、全然失敗に歸した。ミルランがブルジョア内閣に参加した結果は、労働階級に何等の利益をも與へず、一般労働者の眼に、社会民主黨の妥協としか映じなかつた。一九〇七年の選挙の結果は、事荷も帝國主義の盛衰に關するや否や、資本家の勢力増進、資本主義國家の軍備競争の問題に關するや否や、ブルジョアの諸黨派は固く一致提携して、労働者に對して、愈々階級闘争が激しくなるに相違ないといふことを斷言させた程であつた。カウツキーは、一九〇八年に著

した『權力への道』といふ書物の中に、今や資本主義の世界全體が、社会主義的革命的潮戸際を臨んでゐると叫んだ。労働階級の前途は、社会主義革命の切迫を益々確信するようになった。それと同時に「愈々の際、労働者はどうして自分ら、立場を護るか、そしてどうしたら資本主義の根城を抜くことが出来るか」といふ第一の疑問に達着した。

一九〇五年に、獨逸及び球太利の労働者は、早くも大衆的罷業といふ考を抱いた。労働階級の實際の氣分を一向反映して居らぬ小ブルジョア的、平和な生活をしてゐる社会黨首領連の無感覺には頓着なしに、労働者は大衆的罷業を以て、労働階級の基礎的権利の防衛手段であり（一九〇五年イェナに於ける社会民主黨大會）、又は、特に頑強な敵に對する無産階級の攻撃手段（球太利社会黨）であると認めた。するにまた佛國のサンデー、カリストは、總同盟罷工が完全な解放を實現する手段であること認めた。此當時まで、只だ議會の内部で政治的に戦つてゐたばかりの労働階級は、茲に至つて始めて、自分が生産上にどういふ地位を占めてゐるかに想ひ至つた。即ち「腕の力に意思の力を添へれば、總ての車輪は忽ち止まる」といふ、偉大なる事實に氣がついたのである。

數年の間、労働階級の左翼は、總同盟罷工を採るべき場合の條件について議論を闘はせた。それは議會的行動が失敗に歸した時、敵の無鐵砲な政策が民衆を絶望に迫つた時、労働團體首領の凝議によつて決せらるべきものか、議會での争闘に結末をつけるためのピストルたるべきものか、又は首領の會議室で決定せられず、職場や工場で刻々に助成せられる激烈な階級闘争の結果として、自發的に起るべきものか。大戦に先だつ數年の間、國際的労働運動の左翼を支配したのは、是等の問題であつた。そして此單純な問題に對してすらも、同じくマルクス主義を標榜する社会主義者が二派に分れて、陽に社会主義革命を歓迎してゐたカウツキーは、無産階級の内外の形勢が明らかにそれを要求して居るも拘らず、内實階級闘争の激しくなることを避けてゐたのであつた。

權力掌握の方法を見出さうとする此努力の中に、『勝利を得たる労働者は、どういふ風に權力を行使したらよいか』といふ疑問が諸處に發せられた。けれども此疑問に對して何人も耳を籍さうとはしなかつた。誰も彼も革命運動の上